

バビロンの流れのほとりで

【聖書】詩編137編1～9節

バビロンの流れのほとりに座り シオンを思って、わたしたちは泣いた。

豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。 わたしたちを捕囚にした民が 歌をうたえと言うから
わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。

どうして歌うことができようか 主のための歌を、 異教の地で。

エルサレムよ もしも、わたしがあなたを忘れるなら わたしの右手はなえるがよい。

わたしの舌は上顎にはり付くがよい もしも、あなたを思わぬときがあるなら

もしも、エルサレムを わたしの最大の喜びとしないなら。

主よ、覚えていてください エドムの子らを エルサレムのあの日を 彼らがこう言ったのを
「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。」

娘バビロンよ、破壊者よ いかにかいなことか お前がわたしたちにした仕打ちを お前に仕返す者
お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。

[序] 捕囚の屈辱

国を滅ぼされて、敵の国に、国王以下・指導者・軍人と大勢の市民が捕虜として連れて行かれ、そこで暮さなければならなくなったとしたら、私たちはどんな思いになるのでしょうか。イスラエル王国は紀元前1000年にダビデが設立し、その息子ソロモンの時代が絶頂期で、近隣の国々から人々が集まって来る栄光に輝く国でした。それがソロモンの息子の代に北と南に分裂し、北王国は紀元前724年にアッシリヤに滅ぼされ、南王国は前587年にバビロンによって滅ぼされてしまいました。国家としてはわずか413年の寿命でした。

今日の詩編137編では、作者がバビロンの流れのほとりで、シオン(エルサレムの神殿の丘)を思って泣いています。ですから南王国からの捕囚の民から生まれた歌ですね。なぜ泣いたのでしょうか。「豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた」とありますから、幾人もの人が豎琴をひいていたのを止めて、柳の木々にかけたのでしょうか。「私たちが嘲る民が歌って聞かせよと言った」とありますから、捕囚の民が集まって、皆で讚美歌を歌っていたのでしょうか。恐らく礼拝していたのです。

ところがバビロン人が集まって来て、「おや、面白い歌を歌っている、俺たちにも歌って聞かせてもらおうじゃないか」とか「神さまを賛美する歌だって？お前たちの神は、俺たちに負けてしまったじゃないか」などと茶化したのではないのでしょうか。国が滅び、捕虜として連れて来られた連中だと軽蔑され、屈辱に耐えながらの毎日を過ごしていた状況が目に浮かんできます。

彼らの座興に讚美歌を歌うなど、とても出来ません。自分たちが一番大切にしている主なる神さまを馬鹿にされること位、屈辱的なことはありません。礼拝を打ち切り、豎琴を傍らの柳の木にかけて沈黙し、涙を流すことしかできなかったのでしょうか。

「主なる神さま、貴方を心の底から声高らかに賛美したいのです。でも座興に歌ってみろと言う異教徒に囲まれている地では、それが出来ないのです」。故国から遠く、異国の地に連れてこられての生活です。せめて主なる神さまを心行くまで礼拝したいのです。何という悲痛な叫びでしょうか。

[1] 屈辱の痛み

私たちの国、日本も 68 年前に連合軍に無条件降伏して、敵国に占領されました。しかし神と崇められていた天皇が人間宣言をすると、そのまま在位を認められました。軍国主義体制が民主主義体制に変革され、極東軍事裁判で指導者7名が絞首刑に、16 名が終身刑にされた程度で、戦争責任のけりがつけられました。

一方市民には、救援物資を大量に支給されて保護される寛大な占領政策が行われました。農地解放で小作人には自分の土地を耕す自作農の恩恵が与えられました。労働者が組合を作って権利主張が出来るようになりました。占領軍の兵隊、特にアメリカ兵は子供たちに気前よくキャンデーを分けてくれたので、人気がありました。教会にも連れて行ってくれました。こうしてキリスト教がブームになりました。

このような中で朝鮮、満州、中国、東南アジア各地で敗戦を迎えた人々が、日本に引き揚げてくるに当たっては、大変な難儀を強いられました。また広島・長崎の原爆被害者が後遺症に悩まされ続けました。しかし総体的に見れば、日本の敗戦体験は、占領軍が実に寛大で、一般市民にとっては、屈辱感の薄いものだったと言えるのではないのでしょうか。

それに反して、日本が植民地支配した朝鮮半島の人々、日本軍が侵略支配した中国各地や東南アジアの人々の方が、肉体的にも精神的にも、比べることが出来ないほどの悲惨な痛みと屈辱を、味あわされたのです。

私は去る8月18日の説教でも、40年前のベストセラー安利淑さんの「たといそうでなくても」と、牧師の父を拷問で殺された朱光朝さんの証をご紹介しました。朝鮮では日本政府が、村々に至るまで一番良い場所に日本の神社を建て、各家庭に至るまで神棚を配り、強制的に拝ませました。教会の聖壇にまで神棚を置き、最敬礼させるために警察官が聖壇に座り煙草をくゆらせて、監視していたそうです。「気をつけ！まことの生き神さまであらせられる天皇陛下と天照大神(あまてらすおおみかみ)と皇大神宮、八百万の神(やおよろずのかみ)に向かって最敬礼！」。これを拒否した牧師は拷問の末に殺され、女学校教師は逃亡生活を余儀なくされたのでした。

ではバビロンの捕囚の民はどうだったのでしょうか。預言者エレミヤは第一次捕囚の時、自ら希望してエルサレムに留まりました。そして後に彼に示された主なる神の言葉を捕囚の民に書き送っています。エレミヤ書 29 章です。

「家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならな

い。わたしが、あなたたちを捕囚として送った**町の平安を求め**、その町のために**主に祈りなさい**。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから」(5～7節)。

この文面からみますと、バビロンの捕囚生活も、丁度戦後の日本と同じように、**比較的平安にバビロンの町で暮せた**のではないのでしょうか。しかし捕囚という境遇そのものが、今日の詩で叫んでいるような、嘲る民の中での屈辱の日々だったのですね。私たちはこの詩を読むことによって、日本から植民地支配、また侵略支配された朝鮮・中国はじめ東南アジアの人々の**心の叫び**を思い起こして、申し訳なかったと痛感させられます。

[2] 神の裁きと救い

バビロンの人々は、「お前たちの神はバビロンの神に負けてしまったのだ。弱い神、依り頼むに値しない神ではないか」と言って、イスラエルの神を蔑みました。これほどイスラエルの民にとって屈辱的なことはありません。どうして主なる神は、ご自分の民を助けて下さらなかったのでしょうか。

イスラエルの歴史には、**ヒゼキヤ王**とか**ヨシヤ王**のように宗教改革を行って、主の御心に立ち返った王も居ましたが、多くの王たちは、**主の目に悪とされる数々**を行って、主の怒りを積み上げていきました。そして遂に「見よ、わたしはエルサレムとユダに**災いをもたらす**」という宣告を招くに至ったのでした(列王記下 21:12)。

聖書の信仰は、「王が主の目に悪とされることをことごとく行った」ので、主は国を滅ぼされたと記します。**主の目によって国の滅亡が決まる**——人間の思惑や行動が歴史を織り上げていくように見えますが、**歴史は神の御心が働く場**なのです。神さまの御心が歴史に表れていくのです。

王国の滅亡は神の民の罪に対する、**神さまの厳しい裁き**でした。しかし神さまはエレミヤにこう語れとお命じになりました。「主はこう言われる。バビロンに**七十年**の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に**連れ戻す**。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは**平和の計画**であつて、災いの計画ではない。**将来と希望を与えるものである**」(エレミヤ 29:10～11)。

エレミヤは国家滅亡の悲劇を目の当たりにしながらも、イスラエルを今日まで導いて来てくださった主が、ご自分の民をこのまま滅ぼし尽くしてしまわれるはずがないと確信しました。すると神さまは**70年先の歴史**を彼に見せて下さったのです。それが捕囚の民の**喜びの帰還**です。先の見えない異国での捕囚生活に、人々はともすれば絶望に押しつぶされそうになります。しかし主は希望を与える将来を示して下さったのでした。「**それは平和の計画である**」。何と嬉しいことでしょうか。

王国の滅亡は神の民の罪に対する、**神の厳しい裁き**でした。しかし神さまは裁きと共に、将来と希望を与える**平和の計画**をも用意しておられたのです。そして「あなたたちがわたしを**呼び**、来てわたしに**祈り求める**なら、わたしは聞く」「心を尽くしてわたしを**求める**なら、わたしに出会う」「わた

しは捕囚の民を帰らせる」と約束して下さったのでした。

[3] 信仰の完成

しかしそうは言っても70年も先の約束とは、長い月日ですね。私たち日本人にとっては、あの敗戦から今年でやっと68年なのです。当時少年だった私にとっても長い年月でした。祖国への喜びの帰還の日が来るといっても、70年、二世代、三世代も先の話です。つい気持ちが滅入ってくるのではないのでしょうか。

きょうの詩編の5節6節を読みましょう。「エルサレムよ もしもわたしがあなたを忘れるなら、わたしの右手はなえるがよい。わたしの舌は上顎にはり付くがよい。もしもあなたを思わぬときがあるなら もしもエルサレムを わたしの最大の喜びとしないなら」。

右手とは豎琴を弾く手でしょう。舌が上顎にはり付くとは、讚美の歌を歌えなくなることでしょう。これは、ついあなたを忘れてしまい、あなたがどのようにお考えなのかを思わずに生活してしまう自分、あなたを信じ、あなたを礼拝することを最大の喜びとしなくなっている自分に気付いて、このような自分ではいけない、もっと全身全霊を込めて礼拝しなければいけないと我とわが身に言い聞かせている叫びではないのでしょうか。

エレミヤの手紙を通して、「時が満ちたら、あなたたちを連れ戻す」とのお約束に、将来の希望を光を見ることが出来たとしても、長い先の話だとしますと、つい現実の生活に流されて、誰しも、生き生きとした信仰が生ぬるくなっていきがちです。この作者は、バビロン人たちに嘲られて、礼拝を中断し、涙を流しているうちに、こんなことで歌うことを止めてはいけない、主なる神さまを礼拝することこそ、私たちの最大の喜びなのだという歌がこみ上げてきたのではないのでしょうか。

この詩は終わりに、エルサレムが破壊された時に、徹底的に崩れ去れとはやし立てたエドム人や、幼子を岩にたたきつけて殺した兵隊たちを裁いて下さいとの訴えで終わっています。やはり自分たちを痛めつけた者たちへの、恨みと復讐の思いに捕われています。

しかしイエスさまは言われました。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ5:44)。そして自分を十字架にはり付け、あざ笑う人々のために「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23:34)と祈りつつ、死んでくださいました。やはり私たちの信仰は、イエス・キリストを救い主と信じる時に、完成するのです。

私たちは、イエス・キリストを自分の救い主と信じて、それを自分の言葉で表明し、バプテスマを受けることによって、自分の新生、古い自分が死んで神の子とされた新しい自分になったことを表わします。こうして私たちは、キリストと結ばれて生きていくのです。

[結] 全身全霊をこめて

キングスガーデンの施設長から、嬉しい話を伺いました。「先月永眠された老婦人は、リウマチ

による関節の痛みの訴えや、家族に対する愚痴や、かつての主治医への不満や批判が絶えない方でした。周囲は辟易して、一人娘も遠ざかってしまいました。しかし毎日の礼拝に参加しているうちに、『もう、イエス様を信じる以外にないね』と5年前に受洗されました。

すると愚痴も悪口も言わなくなったのです。やがて娘さんが再び面会に来るようになりました。誰からも好かれる**穏やかな最晩年**を過ごし、娘さんに看取られながら静かに召されました。火葬後にお骨の中から太い金具が3つ出てきました。40年前に両肩と大腿骨を手術した時に留め具として使われたもので、3つで2キロあったそうです。『こんな重荷を負って、母は耐えていたのだ』と家族(戻ってきた息子も)は泣き、遺骨と一緒に大切に持ち帰りました。リウマチの痛みや愚痴・不満を一切言わなくなった受洗後の変化——これこそ、文字通り私たちと一緒に**重荷を負って生きて下さる救い主の御業に違いありません**」

そうです。イエス・キリストと結ばれ、**イエス・キリストと一緒に生きて下さる信仰生活**、何と素晴らしいことでしょうか。新しい一週間の歩みを始める日曜日の朝に、私たちは教会に集い、礼拝を捧げています。誰からも妨げられることはありません。**心の底から声高らかに賛美いたしましょう。**

神さまの目に良いとされることを行おうとする時、私たちは真剣にみ言葉を読み、祈らなければならなくなります。自分の欲や世間のやり方になびこうとする心と激しく戦う時、礼拝を大切にして、心と体を整えようとしします。**全身全霊を込めて礼拝いたしましょう。**キングスガーデンの老婦人を変えて下さったイエスさまは、私たち一人一人とも、一緒に重荷を負って生きてくださっているのです。**礼拝することを最大の喜びといたしましょう。**

完